

けいえいそうだんしつ 経営相談室だより

株式会社ソフィアステージ
代表取締役
ふくにし あやみ
社会保険労務士 福西 綾美

／ 頑張っています！

社会福祉法人の地域貢献

大阪しあわせネットワークでは、市町村域での施設と社協の協働体制の強化をすすめています。今回は四條畷市地域貢献委員会での地域と施設が協力した防災の取り組みを紹介します。

地域とともに備える

「なわてde防災(防災運動会)」

施設と市民が一緒に防災を学ぶ

令和8年3月15日、四條畷市で社会福祉施設と地域住民が一体となる防災イベント「なわてde防災」が開催されました。社会福祉施設は日頃から防災訓練や備蓄を整備していますが、市民の防災意識には差があり、施設の役割も十分には知られていません。そこで、四條畷市地域貢献委員会会長の石倉 智史さん(るつてるホーム)は「地域の方々には施設を知ってもらいながら、災害時に自ら考え行動する力を養う場」と企画を立案しました。

▼施設・社協職員がスタッフとして運営



▲避難所設営シミュレーションのようす

運動会形式を取り入れたプログラムでは、避難所運営シミュレーションや伝言ゲームなどを通じ、遊びながら防災行動を学びました。最後には炊き出しをみんなで囲み、気づきや学びを共有しました。

有。楽しみながら、日常生活でも生かせる防災の知識を身につけられる内容になりました。

地域福祉と協働の広がり

企画・運営は、23の社会福祉施設などと社協が連携し、民間団体「TEAM学防(まなぼうがく)」の協力も得て行われます。石倉さんは「施設の機能や役割を日頃から知ってもらうことで、災害時に『ここがあつてよかった』と思える体制をつくりたい」と話します。

また、四條畷市社協の井上 博詞さんは「社協だけでなく、地域とともに取り組むことに意義がある」と語ります。子どもから高齢者まで幅広い世代が参加し、地域で支えあう力を育むことが、この取り組みの本質です。今後は、自治会や商工会とも連携を深め、福祉の枠を超えてまちづくりや人づくりにもつなげていく方針です。

石倉さんは「福祉はすべての市民にとつての普段の暮らしのしあわせになる」と強調します。地域と施設が一体となり、防災への備えを深める「なわてde防災」は、災害に強いまちづくりへの大きな期待となっています。



井上博詞さん(左)と石倉智史さん(右)

セルブ部会・大阪授産事業振興センター 地域の施設・企業・学校とつながり、 広がる協働のかたち

セルブ部会・大阪授産事業振興センターと会員施設は、障がいのある方の「はたらく」「くらす」の支援を行っています。その一環として、施設利用者が作成した授産製品の展示販売会が実施されています。

今回は(福)わかさ福祉会わかさで障害者作業所の取り組みを紹介します。

ハートtoハートがつなぐ協働の輪

わかさ福祉会は毎年、複数の障がい者事業所とともに「ハートtoハート」を開催しています。今年もイオンモール茨木で開催された二十年以上続く歴史ある販売会(バザー)で、多くの買い物客や地域の方々にも親しまれています。



ハートtoハート出展法人の皆さま

施設間の協働の輪も広がってきました。わかさ障害者作業所が大切にしていくのは、「福祉」を前面に出すすぎないこと。職員の高橋 貴雅さんと田村 翔さんは「職員も利用者も、自分たちの製品の価値を信じています。『障がいのある方が作ったもの』という先入観で製品が選ばれるのは、真摯に取り組む利用者にも失礼だと思うんです」と語ります。

一般の商品と同じようによい商品だと感じて手に取り、パッケージを見て初めて授産製品だと気づいてもらえることを理想としています。

「障がい理解に向けた新たな取り組み」令和7年度、地元大学と協力し、付属小学校の児童とイベントを開催。打合せ時、子どもたちが視覚や聴覚に障がいのある利用者や背中文字を書いた会話する場面もあり、世代や障がいを超えた交流に職員も驚かされました。設立当初から大切にしてきた「障がいのある方の権利を守る」という視点を軸に、新たな取り組みを積み重ねてきました。こうした歩みが、利用者の工賃向上や前向きな気持ちを支えています。利用者とともに心を込めて、誰かの心に届くことを願いながら活動しています。

多様性を生かした職場づくり

世代・文化・立場を越えて生まれる現場の底力

年齢や性別、国籍、正規職員・有期契約職員など、福祉現場は多様な職員で構成されています。採用活動を行っても、必要な人数を確保することが難しい現実があります。また、子育てや家族介護などさまざまな事情から、多様な働き方を希望する人も増えています。

経験豊かな先輩と連携を取ったり、外国人職員とともにケアを行ったり、子育てや家族介護と両立する同僚とシフトを組んだり。さまざまな立場を理解しあいながら、同じ利用者の一日を支えている…。多様な立場の皆さんが働く現場は、一時的なものではなく、現場を支える前提となっています。

●多様な世代のさまざまな経験が響きあう

若い世代も、中高年世代も、定年後も現場に立つ人もいます。生きてきた時代が違えば、その時代の中で培われた価値観や、人との関わり方も少しずつ違います。また、職歴の長さや、他業種での経験、家庭や地域での人生経験もさまざまです。

たとえば利用者が落ち着かないようすのとき、ある職員は自分と同世代の利用者の言葉にならない不安を感じ取り、別の職員は過去の経験から微細な体調の変化に気づき、また他の職員はこれまでの生活歴に思いを巡らす。多様な視点が重なったとき、対応はぐっと深まります。

人生の中で積み重ねてきた出来事すべてが力になります。多様な世代のさまざまな経験が交わることで、現場に思いがけない化学反応が生まれます。

●文化を越えて磨かれる力

外国人職員と働くなかで、「伝えたい」というだけでなく、「伝わったか」を確かめる習慣が身につくと、思いがけずわかりやすい言葉を選び、確認を重ねて、曖昧さをなくす。その積み重ねは、利用者や家族とのコミュニケーションにも影響し、「よりわかりやすく伝える」ということにもつながります。

言葉が通じないことは、「言葉の壁」ではなく、「コミュニケーションをいかに円滑にするか」を見直すきっかけ

●立場を越えて育つ力

子育てや家族介護、自分自身の体調や体力的なことなど、誰もが何らかの事情を抱えながら働いています。

「今日は私が代わりにやります」「体調大丈夫?」といった一言が出て、お互いが気遣うことができるのは、自分自身が誰かに助けられたり、あるいは温かい言葉がけをしているようすを見聞きしたりしているからこそ、自然と身につけている、ともいえます。

支える側と支えられる側は、固定ではありません。その循環があるからこそ、チームワークが育まれていきます。立場を超えた相互理解が、現場を支えています。

●現場の底力を、これからの力へ

このような福祉現場の力について、あえて言語化して伝えあうことは少ないかもしれませんが、

多様性を生かした職場づくりとは、何か新しいことをはじめるのではなく、すでに現場にある力を意識し、さらに磨いていくことだといえます。

「多様な職員が持ち寄るさまざま

以下は広告スペースです。

第55回
交通事故物故者
合同慰霊祭
令和8年5月31日(日)
14:00~15:30
会場：大阪府社会福祉会館5階

事前申込み：必要
TEL 06-6761-5296
大阪交通災害遺族会

主催
公益財団法人大阪交通災害遺族会



まな力があるからこそ、私たちの現場は成り立っている。だからこそ、世代・文化・立場を超えて生まれるこの底力は、ますます重要になります。現場の一つひとつの支えあい、福祉という仕事そのものを支えています。

年度のはじめに当たり、ぜひそのことを心に留めていただければと思います。皆さんが日々積み重ねているこれらのことが、これからの福祉を支える確かな力なのです。